

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008年～2010年

課題番号：20401023

研究課題名(和文) ビジネス日本語能力テストの信頼性と妥当性の連関に関する実証的研究

研究課題名(英文) Research on the Reliability and the Validity of Business Japanese Proficiency Test

研究代表者

前川 眞一 (MAYEKAWA SHINICHI)

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授

研究者番号：70190288

研究成果の概要(和文):

本研究は、ビジネス日本語能力テストにおいて、テストの妥当性と信頼性の連関についての実験・検証を行った。本研究から、統計的性質が特異であったために試験実施後に項目プールへ追加されなかった項目も、適切に改変すれば再利用できることが判明した。このことは、大規模試験の現場に於いて項目作成の合理化の方法の一助になると考えられる。また、同時に実施したテスト・ピリフ調査では、語学テストやビジネス日本語能力テストに対する高得点グループと低得点グループの意識や考え方に差異が認めることが解明できた。

研究成果の概要(英文):

In this research, we investigated the validity and the reliability of Business Japanese Proficiency Test (BJT), one of the large scale language test program in Japan. In the aim of improving the efficiency of item banking, a set of those items whose test-theoretic characteristics had been found to be unsatisfactory were modified following a newly developed guidelines for modification. As the result of several simulated administration of the modified items, we found that the modified items performed better than the original ones showing the usefulness of our new guidelines. The belief questions administered at the same time showed that the high and the low ability group differ in their beliefs and attitudes toward the test taking.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2009年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2010年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総計	12,400,000	3,720,000	16,120,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：テストング、ビジネス日本語、テストの信頼性、テストの妥当性、項目バンク、項目プール

1. 研究開始当初の背景

日本の公的な機関が実施する大規模な日

本語試験は、幾つかの新たな試験が創設され多様化が進んでいる。公的機関が運営する主

な試験として、日本語能力試験（日本国際教育支援協会・国際交流基金）のほか、日本留学試験（日本学生支援機構）、BJT ビジネス日本語能力テスト（日本漢字能力検定協会）の3つが広く国内外で実施されている。一般に、言語能力の評価・測定においては、テストの信頼性・妥当性・実用性という3つの側面からの検討が必要不可欠である。しかしながら、以上の3つの公的な日本語試験においては、信頼性と実用性についての検証はある程度十分に行われてきているが、妥当性についての検証および信頼性との連関についての検証は、未だ十分に行われきっておらず脆弱な状況である。経済や社会がグローバル化するにつれて、教育の国際化が進行している現在、それを支える教育定情報の流通・共有化が必要である。その一つの指標として重要な役割を果たすのがテスト（評価・測定）であり、本研究によって得られる日本語テストの信頼性・妥当性に係る実験分析データは、信頼性・妥当性のより高い教育指標あるいはテスト開発の資料として活用され、日本語教育実践にも有効にフィードバックされると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、以上の3つの公的な日本語試験のうち、BJT ビジネス日本語能力テスト（以下、BJT）を資料として、信頼性と妥当性の橋渡しとなる実験・分析を行い、受験者すなわち言語使用者の立場に立った実証的な基礎研究を行うことを目的としている。具体的には、以下の3点について、検証・分析を行う。

(1) 過去の BJT の出題項目から、統計的性質が特異であった問題項目（以下、特異項目）を抽出し、その解答傾向から項目の妥当性の検証を行う。

(2) (1) の検証結果に基づいて特異項目に修正を施し、その修正が項目パラメータの改善に寄与したか、統計的に分析する。

(3) ピリーフ調査を実施し、日本語非母語話

者が言語テストに対しどのような意識を持っているか明らかにする。

3. 研究の方法

最初に、テスト結果から、問題項目の特異なものを抽出し、その個々の項目について、要因を検討した。次に、その要因を克服する形で形式・内容を改変した問題項目を含む実験テストフォームを開発した。それを、国内および国外（タイ、韓国、中国、香港）で日本語を学習する受験者計 1128 名に対して実施した。解答はすべてマークシートにより収集、データ化し、分析を行った。また、同時に、ピリーフ調査を行った。ピリーフ調査は、質問紙調査法で、質問項目は、日本語テストに対する意識、テストと学習との関係、テスト勉強の効果等、日本語テスト全般に関する 26 項目、BJT に関する 8 項目の計 36 項目で構成した。

4. 研究成果

実験テストの解答データを分析するにあたり、既知の IRT (Item Response Theory) 項目パラメータを用いて、共通項目モデルによる尺度等化を行った。その上で、特異項目の修正前と後の項目パラメータを比較した。その結果、修正を施した特異項目のほとんど全てに関して、その統計的項目特性の改善が観察された。改善に寄与したと考えられる修正点には、以下のような諸点が挙げられる。

(1) ビジネス場面で使われる抽象的な表現が、困難度を上げ、同時に識別力を下げる可能性が考えられるため、問題項目のテキスト部分に複数の情報を配置し、いろいろな表現からヒントを得られるようにパラフレーズすること。

(2) 聴読解問題項目において、視覚情報（文字情報）と聴解情報との整合性を保つようにすること。

(3) 読解問題項目の課題文は、いつ、だれが、どこで、だれに対して、どのような状況で当該文書が書かれ、それを読む者は、いつ、どこで、どのような状況で読むのかなど、状況

や文脈を適正に設定すること。

(4) 語彙・文法問題項目においては、受験者の母語の干渉が項目識別力を低くする要因となりうるため、選択肢の作成には、受験者の母語の表現に配慮すること。

(5) キーワードのマッチングで正答を選べる問題項目は、日本語レベルの低い受験者も正答を得やすく、識別力が低くなるため、できるだけ避けること。

(6) その他

本研究で得られた以上の知見は、従来、項目の統計的性質が不備であるために、予備試験段階もしくは本試験実施後に項目プールへ追加されなかった問題も、適切な改変を加えれば、新たに、統計的資料として再利用できることを示したもので、大規模試験に於いて項目作成の合理化・精緻化の一助になると考えられる。

また、ピリーフ調査の回答データを数値化し、因子分析を行った。BJT の点数により調査参加者を 3 グループに分け、そのうち、高得点グループである H グループと、低得点グループである L グループのピリーフを比較した結果、次の事が明らかとなった。まず、「BJT 就職有効性因子」の結果から、H グループ、L グループ共に BJT を受けることや、BJT のために勉強することは就職や仕事の役に立つと思っていることがわかった。また、「語学テスト有効性因子」から、L グループの学習者は H グループの学習者よりも、どうすれば語学テストで高得点が取れるのかを模索し、また語学のテストに向けて勉強することによって語学力がどのように伸びるのかを敏感に感じ取っていることが明らかとなった。そして、「高得点獲得環境因子」では、H グループ、L グループ共に仕事をしていることや、日本企業や日本人と働くことが BJT で高得点を得るために大切な環境であると考えていることがわかった。また、有意差のあった項目では、L グループの方が、H グループよりも、目標言語が使用されている国に住んでいる方が語学テストで高得点を取れること、聴解試験で高得点をとれる人が目標言語の母

語話者（日本人）と円滑に会話ができると考えていることが明らかとなった。最後に、「テスト好悪因子」では、H グループ、L グループ共に、言語テストが得意ではないと考えているものの、H グループの方が L グループよりもテストに対して得意意識があることがわかった。しかし、両者とも語学テストが好きだとは思っていないことも明らかとなった。また、L グループの方が H グループよりも聞き取りや聴解試験に対して苦手意識があることなどが判明した。

5. 主な発表論文等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

・前川 眞一 (MAYEKAWA SHINICHI)
(2009~2011 年度)
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授
研究者番号：70190288

・加藤 清方 (KATOH KIYOKATA) 2008 年度
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：20185838

(2) 研究分担者

・前川 眞一 (MAYEKAWA SHINICHI)
2008 年度
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授
研究者番号：70190288

・加藤 清方 (KATOH KIYOKATA)
(2009~2011 年度)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：20185838

・越前谷 明子 (ECHIZENYA AKIKO)
東京農工大学・留学生センター・名誉教授
研究者番号：30213549

・梅木 由美子 (UMEKI YUMIKO)
宇都宮大学・留学生センター・教授
研究者番号：60203577

(3)連携研究者

・小野塚 若菜 (ONOZUKA WAKANA)
東京富士大学経営学部・非常勤講師
研究者番号：30574165

・吉沢 由香里 (YOSHIZAWA YUKARI)
東京工業大学・留学生センター・
非常勤講師
研究者番号：なし

・齊藤 良子 (SAITOH YOSHIKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・
博士課程在学
研究者番号：なし

・川端 一博 (KAWABATA KAZUHIRO)
日本国際教育支援協会
研究者番号：なし